

2024.07.31

オンライン講座

精神医学（各論）_8_精神疾患の対応_1



もりさわメンタルクリニック

妄想についての会話

状況：一人でぶつぶつ言っていることが増え、食事も摂れていないのを見かねた母が声をかけた。

会話の内容

家族：ごはんを食べなきゃだめですよ。ずっと食べなかったら死んでしまうわよ！（心配から感情的になっている）

本人：変な味がする。毒が入ってる。この家の物は食べられない。

家族：毒なんて入れるわけないでしょ！お母さんが作ったごはんが食べられないの？（本人の感覚を真っ向から否定している）

本人：みんなぐるになってる。さっき電話で話してたのも、俺を殺す相談だ。

家族：何を言ってるの！あんたのこと心配してお父さんが電話くれたんでしょ！（あなたの言うことは理解できないというサインになっている）

本人：今のおやじは偽者だ。あんたも命令を受けてる。

家族：そんなわけないでしょ？みんなあなたのためを思ってるのに…（否定から入っているので、助けたいという意図が伝わりにくい）

本人：俺が気づかないと思って…毒を食わせて俺を弱

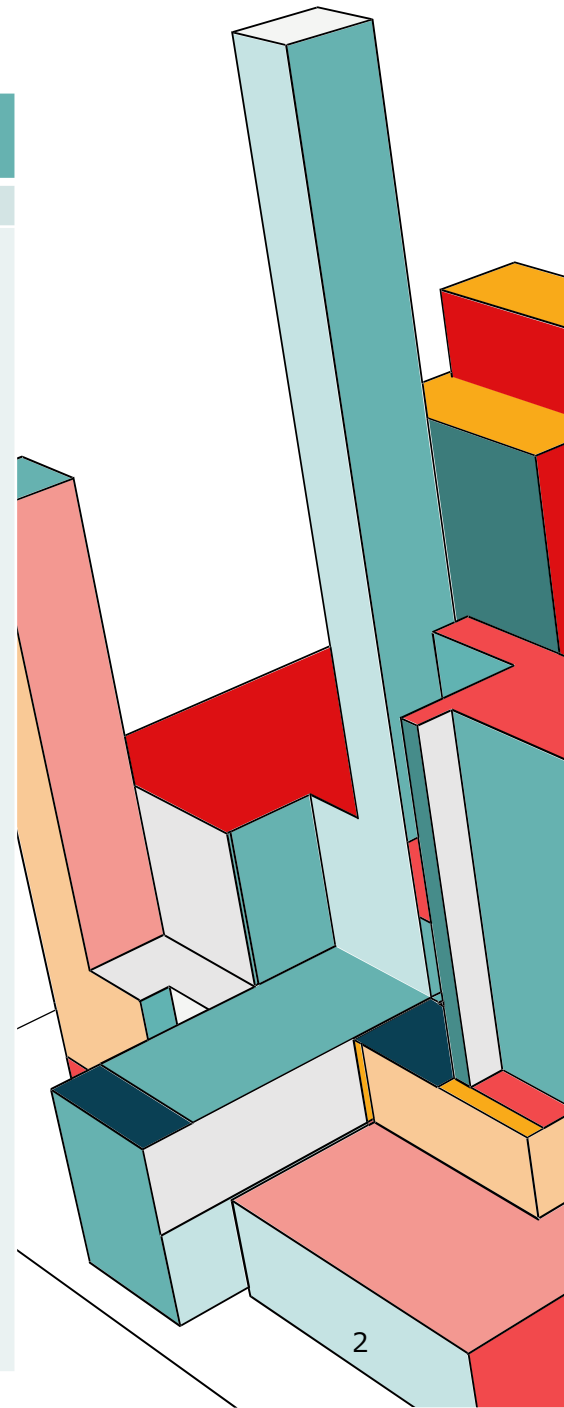
変えるとしたら

⇒（まずは相手の辛さを思いやる）ごはん…食べられないの？辛そうね。

⇒（本人の体験、感覚を確認する）そう…変な味がするのね。どんな味なの？

⇒（本人の言うことを反復して、話を聞いているサインを送る）…ぐるになってると思ったのね。（次に本人の猜疑心を和らげる方向を探す）…今度からあなたのことを話すときは、あなたに言う前にするわね

⇒（真っ向から否定することだけは避ける。本人の味方であることを明確に伝えようとする）わたしはあなたを少しでも助けたいの。きっと、お父さんも同じ気持ちだと思う。



らせるつもりなんだ。

家族：あなたを弱らせてお母さんにいったい何の得があるの？（確信の強い妄想に対して、常識的な気づきを促す対応になってしまっている）

本人：警察に行く。このままじゃ、殺される。（家から出て行く）

⇒（味方であることを繰り返し伝える）本当にあなたを助けたいの。（現実との接点を探すために、一緒に考えようという協働の姿勢を示す）今まで出したものを食べるのがつらいなら、食べられるものを一緒に考えてみましょう。

（参考）

- ①ごく軽度の妄想（妄想気分）の時には「心配なくて良い」「大丈夫」だけでも効果がある（一定の根拠を示す場合もあるが、必ずしも必要ではない）
- ②助言を求められたら妄想の核心は否定せずに現実との接点を探す（ここでの例では毒を入れたか入れないではなく、何とか食べられるものが見つかるかということ）
- ③少しでも否定したら怒りそうな時は聞くことに集中する（反復・うなずき・相づちだけでも相手を受け入れているメッセージになる）。議論（言い合い）だけは避ける。余計に妄想に固執する。重要な援助者が妄想対象になる。どちらにしろ本人にとって大きな損失につながる。

